

研究者のモラル

1年ほど前、人事院の行政研修（研究職室長級）を受講した。2週間の研修で、国の研究機関の研究者を中心に43名が参加し、我が国の科学技術の発展に向けて我々がいかにあるべきかについて様々な角度から検討を行った。

研修で特に印象的だったのは研究者のモラルに関する点である。国民の税金を使って研究するからには、その成果を社会に還元することは当然であり、研究に着手する際は、その研究の必要性を国民に十分理解して頂かなければならない。しかしながらその研究の本質や必要性を最終判断できるのは研究者自身である。自分の行っている研究が社会にとっていかに必要とされているか客観的に厳しく評価を行わなければならない。また一方で、研究者の成果に対する情熱と信念が成功への強力な推進力となる。客観性と信念という一見相反するもののバランスを取りながら己を捨てて研究に没頭する。このような禁欲的な態度がこれまで社会の研究者に対する信頼を高めてきたのだと思われる。

研究分野に対する専門知識を持たない一般の人々が非常に専門的な研究内容について評価を行うことは難しく、最後には研究者を信頼して全てを任せざるを得ない。現在の研究環境は社会と研究者の信頼関係の中で保たれており、その信頼を裏切れば科学技術への新たな取り組みは不可能となるだろう。

昨年、研究最前線から後方支援部隊に仕事は変わったが、行政のあり方が問われている今、社会から信頼され仕事を任せられるために研究所が今後どうあるべきかが新たな課題となっている。

（記 大沼 秀次）

* * * *